

繁昌亭 11 年から見える上方落語の行方

やまだりよこ

天満天神繁昌亭（大阪市北区天神橋 2-1-34）は、2006 年 9 月 15 日に開場した。大阪天満宮の北側敷地に建った 3 階建ての小屋は延べ面積約 590 平方メートル。席数は 216、補助席・立ち見を入れて定員 256 人。決して大きくない小屋だが、寄席文字の看板が掲げられ春団治ゆかりの人力車も設置されて、落語の小屋らしいたたずまいだ。天井と外壁には計 1500 以上もの提灯がびっしりと並び、寄付（一口 1 万円）をした個人や企業の名が記されている（写真 1～3 参照）。

約 2 億 4000 万円という膨大な建設費は、公的支援を一切受けず、人々の浄財ですべてまかなわれた。約 700 平方 m の敷地は大阪天満宮の無償貸与によるものだ。

ふりかえれば、漫才の台頭によって昭和の戦前から戦後にかけて上方落語は著しく衰退した。しかし、六代目笑福亭松鶴や三代目桂米朝、三代目桂春団治、五代目桂文枝らの尽力によってみごとに復興をとげた。その四天王が何より願いながら果たせなかったのが落語定席の復活であった。その夢が実現した約 60 年ぶりの落語専門の寄席小屋である。

「繁昌亭ができたのは四天王ら師匠方が頑張ってくださったその信用があったから。感謝の気持ちを忘れたらあかん」と上方落語協会の桂三枝（現・六代桂文枝）会長は、昔、六代目松鶴が名付けた「千里繁昌亭」から落語家にふさわしい「日」を重ねる「昌」を使う「繁昌亭」の名をもらい、桂米朝に頼んで書いてもらった墨書「楽」の額を舞台に掲げた。ほかに五代目文枝ゆかりの膝隠しと見台、初代春団治ゆかりの赤い人力車（鈴木美智子氏寄贈）も置いて、四天王の尽力を忘れぬ証とした。

こけらおとし公演は 9/15～9/24 の 10 日間・計 30 公演が開催され、上方落語家のほぼ全員が出演した。こけらおとし初日、真新しいひのきの舞台にあがった桂春団治は、口上で「隔世の感があります。米朝も亡き六代目松鶴も桂文枝（先代）も共に落語の寄席を作るのが悲願でした。ついに夢が叶いました」と誕生を心から喜んだ。桂三枝（現桂文枝）、桂ごこば、笑福亭鶴瓶、それに露の五郎兵衛までが口上でうれし泣きをした（写真 4 参照）。

それから時は流れて 2017 年 9 月、開場から丸 11 年が経った。この間に、天満天神繁昌亭（以下、繁昌亭）はさまざまな影響や変化をもたらした。それらを検証しながら、上方落語の行方を考察・展望する。

天満天神繁昌亭のあゆみ

繁昌亭誕生の立役者となった上方落語協会会長の桂三枝（現桂文枝）は、建設に動いた契機として「大阪で落語を見たくてもどこに見に行けばいいのかわからない、と人に言われた、その言葉が一つのきっかけでした」と語っている。

桂三枝（現桂文枝）が 15 年ぶりに行われた会員の選挙で上方落語協会の第 6 代会長に選出されたのは 2003 年 7 月のことだ。協会は 1957 年 4 月にわずか 18 人で結成され、以来親睦団体のままやってきたが、三枝会長は就任の翌年、2004 年 8 月にかねてからの懸案だった「社団法人化」を実現させた。のちに「公益社団法人」（2011 年 4 月認定）となるが、協会を公的な組織にしたことは繁昌亭建設の大きな布石となった。この年の 1 月にはすでに天神橋筋商店街、大阪天満宮との話し合いで寄席小屋建設の話が急浮上していた。

そうして、2005 年 2 月 14 日に「天満天神繁昌亭」発起人会が発足し、市民からの寄付金募集をスタート。同年 12 月 1 日には起工式が行われ、2006 年 8 月 8 日に竣工式を迎えた。この日、黒紋付羽織袴の正装で集まった桂春団治らおおぜいの上方落語家は口々に「夢のよう」と感激の声をあげた。玄関前に出て笑顔で喜び合う皆の記念写真は、開場から現在に至るまで繁昌亭のパンフレットの表紙にデザイン化されて、毎日お客に配られている（写真 5 参照）。

繁昌亭は大阪で、いや関西で唯一「落語はここで見られます」とはっきり言える「場」となった。では、どれぐらいの人が訪れたのだろうか。実は開場前、ベテランの落語家たちが最も心配していたのは、毎日ある昼席の集客であった。戦後の上方落語家はみな定席を経験していない。不安な声があがるのももっともで、落語に人が来るのかという自信のなさが根底にあった。しかし、フタを開ければ杞憂に終わったのである。

団塊世代が定年を迎えて安価な大人の娯楽を求めるニーズに合致したのだろう、中高年が詰めかけた。さらに、上方落語の世界に飛び込んで成長する若い女流落語家を描く NHK 朝の連続テレビ小説「ちりとてちん」（2007 年 10 月～2008 年 3 月放送）の放送や、映画や本も含めメディアによる落語発信が相次いで、追い風ばかりが吹いた。開場を待つ行列が天満宮境内にまで長く伸びる光景がほぼ毎日見られ、開場 70 日で入場者 3 万人を達成。当初 3 年ほどは「繁昌亭ブーム」と言われるほどの大入りが続いた。

以下、発表された累計総入場者数の推移だ。

- ・ 2007 年 5 月 25 日 10 万人達成 ・ 2009 年 10 月 13 日 50 万人達成
- ・ 2013 年 8 月 12 日 100 万人達成 ・ 2017 年 6 月 30 日 150 万人達成
- ・ 2017 年 9 月 15 日 = 11 周年（同年 8/31 現在）152 万 6860 人

恩田雅和支配人によると、ブーム以後は多少減ったが月平均 1 万人が来場し、極端な増減はない状況。団体客がコンスタントに 3～4 割を占めており、近畿圏を中心に中学・高校からの団体もまじる。また、学生の団体をのぞくと、来場者の年齢層は中高年がほとんどで、男女比でいうと女性の方が 6 対 4 ぐらいの割合で多いと語っている。

付け加えるなら、昼席の番組は週替わりで、出演する落語家の顔ぶれで客数には差が出ており、昼席の客は初心者が大半とはいえ、二度目三度目のお客も多く彼らは当たり前だが演者を選んで来ている。とはいえ、関西の笑いといえば漫才と、落語に見向きもしなかった人々や落語を生で楽しもうなどと考えもしなかった高齢者が気軽に足を運んでいる。そうした食わずぎらいをも引き寄せて初心者の格好の入り口になったのは間違いない。

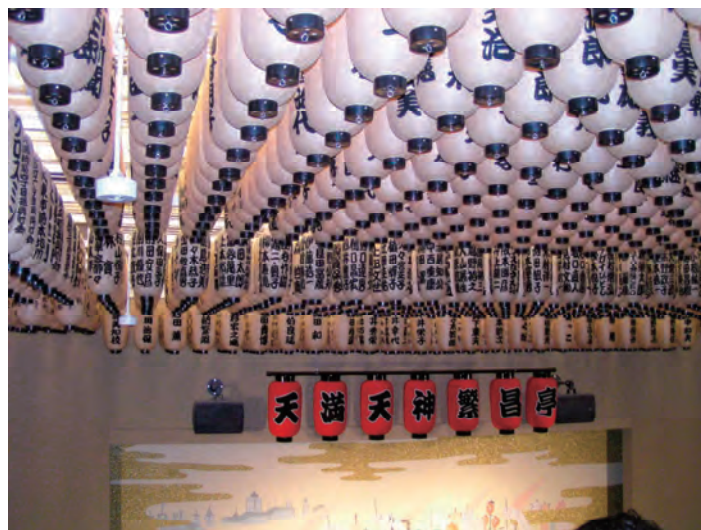


1 天満天神繁昌亭

(筆者撮影)

2 繁昌亭天井に並ぶ提灯

(筆者撮影)

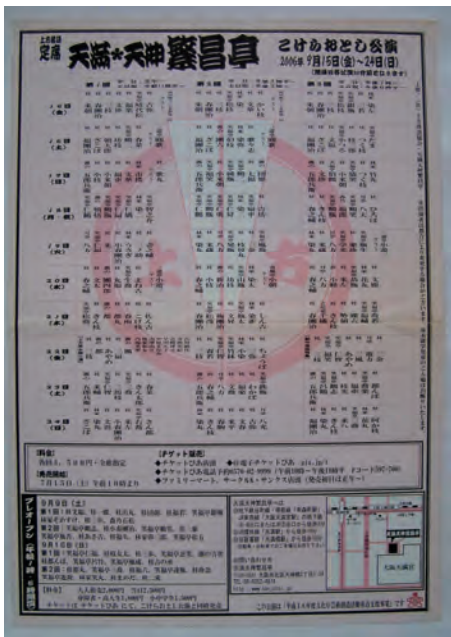


3 建設資金の寄付募集のチラシ

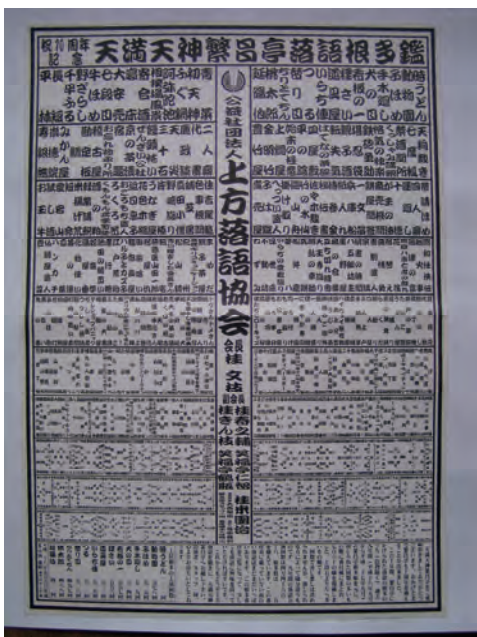
(筆者撮影)



4 上方落語家のほぼ全員が出演したこけらおとし公演のチラシ（筆者撮影）



5 毎日配られるパンフレット表紙に繁昌亭竣工の喜びをとどめる（筆者撮影）



6 開場 10 周年に配られた「天満天神繁昌亭落語根多鑑」（筆者撮影）

2015年9月に昼席料金は前売2000円→2500円に、当日2500円→3000円に、初めて500円もの値上げが敢行されたが、ほかの伝統芸能や音楽系イベントと比べれば格安のためか、影響はほとんどなく、まだまだにぎわいを見せている。

一方、新聞でも発表されたが、2016年9月に関西大学の宮本勝浩名誉教授が「天満天神繁昌亭10周年の経済効果」を計算した結果、10年間に大阪府内に約287億9714万円の経済効果と、2745人の雇用創出効果をつくり出したと試算。この数字は繁昌亭の影響力を裏付けてもいよう。ちなみに、2007年9月のことだが、大阪商工会議所は、繁昌亭の経済波及効果は年間116億円余りになると試算していた。

いずれにしろ、繁昌亭がさまざまな方面で利益を生み出しているのは間違いなく、わかりやすい例で言えば、商店街はどこもスーパーやコンビニに押され、閑古鳥が鳴くところも少なくない中で、繁昌亭の誕生後、隣接する天神橋筋商店街は目に見えて人通りが増えた。地元の活性化と文化発信を目的に繁昌亭建設に全面的に協力した当時の天神橋筋商店街連合会会長の土居年樹氏（2016年8月死去）は、公的支援を全く受けずに完成した繁昌亭を「大阪らしさの結晶」と誇らしく言い、2011年に取材した折には効果の大きさをこう語っていた。「繁昌亭のおかげで商店街の人通りは1.5倍に増えた。それが5年間変わらない。日本中の商店街が衰退していく中で人出が増えているのはすごいことである。活性化のモデルケースになったと思います」。この取材から6年経ったが、商店街のにぎわいは変わらない。

地下鉄「南森町」駅やJR「大阪天満宮」駅から2～3分で行け、庶民的だが老舗も洒落た店も多い日本一長い商店街が貫く界限という立地にも恵まれた。大阪の新名所になった繁昌亭は、人とお金の大きな流れを創出したと言えるだろう。

また、上方落語唯一の寄席と言える繁昌亭は歴史的に見ても、例のない特殊な小屋だ。運営するのは落語家個人や席主や席亭でもなく、ましてや、吉本興業や松竹芸能といった大手の芸能プロダクションでもない。2008年から「特定非営利活動法人 上方落語支援の会」（大阪市北区天神橋3-5-15）が主に会計などの管理・運営にあっているが、寄席の具体的な番組制作や企画は、上方落語協会の現役落語家たちで構成する各委員会が協議・決定している。落語家の上下関係や仲間意識が微妙に影響する欠点もあるが、公的機関やプロダクションの意向や圧力に左右されない自主興行が、今のところ功を奏していると言えよう。

上方落語にもたらした「場」の意義

さて、上方落語そのものに与えた意義および影響を見てゆく。

「繁昌亭以前」の上方落語界の状況をざっと振り返ってみると、落語家は吉本、松竹、米朝事務所のいずれかに所属するか、フリーの立場で個々に活動。とはいえ、たまにある一門会や継続されている勉強会はほとんどが米朝一門で、笑福亭や春団治一門がまじるのは同期会か、公的機関やホール主催の大きな会、あとは地域寄席などで顔を合わす程度だ

った。三代目桂春団治、五代目桂文枝は名人会や年一度の独演会、後援会主催の会など限られた会でしか見ることはできず、一般的には、桂米朝、桂枝雀らが活躍し落語会の質と量でも群を抜く米朝一門＝「上方落語」と思っている人が少なくなかったはずだ。

繁昌亭開場に合わせて出版した拙著「上方落語家名鑑ぷらす上方噺」で、落語家のほぼ全員（約 200 人）に取材した際、ふだんの落語会で見たことがない落語家の多さに改めて驚いた。半数近くにおよび、人に知られず知らせようともせず、一体、どこで落語をし、そもそも落語で食べていけるのか、そこから率直に聞いてみた。

返ってきた答は家庭事情も含めバラバラだったが、しゃべりの巧さを利用した講演、慰問、余興、式などの司会、さらに町内だけの小さな地域寄席などに活路を求めている、半ば休業状態の人も多く、中には「やめようと思ってる」という中堅までいた。それでも、落語への思いは一様に胸に秘めていて、繁昌亭という定席ができて出演する場ができるのを楽しみにしていた。自分で「場」を作れない、「場」を求めても客を集める自信がない落語家たちは、米朝一門のように総帥が牽引して全員が研鑽・普及に励むような、あるいは同期や先輩後輩との交流で向上心に触れてかきたてられるような、そんな熱い空気の後押しもなく、閉塞状態だったと言えよう。2002 年に上方落語家は 200 人に達したが、新米の若手は 3 年の修業を終えても実演の場づくりに苦心していた。4 つも定席（鈴木演芸場、新宿末廣亭、池袋演芸場、浅草演芸ホール）があり、見習いから前座の修業をしっかりとでき、大多数の落語家がそれらの寄席を回ることができる東京とは、全く違う寒い状況だったのである。

「場」のない状況を象徴するのが「島之内寄席」だ。1972 年に当時協会会長だった六代目笑福亭松鶴が音頭をとって協会主催の上方落語定席として島之内教会でスタートしたが、その後、会場は転々とし、2017 年 4 月からは 10 か所目となる大阪市立中央会館ホールに移った。客も右往左往するような流浪ぶりで、戦後、落語専門の小屋を持たず、常に間借り状態で来た上方落語の状況の不安定さを物語っていよう。それが大きなマイナス面であったが、一方でプラスにも働いた。桂米朝が切り拓いたホール落語をはじめ、やる気のある落語家たちは寺や神社、公民館や料理屋、そば屋、喫茶店などあらゆる場で臨機応変に会を開き、ファンを増やしてきた。関西一円の町々で続く多くの草の根的な地域寄席はそんな落語愛好者が主宰するものだ。

繁昌亭開場前、関西の 1 ヶ月間の落語会の数は平均で 200 ほどもあったのは落語家と支援者の草の根の努力があったからだ（落語会情報をほぼ網羅したサイト「ねたのたね」より）。繁昌亭はその状況をいい意味で一変させた。単純に昼席夜席を合わせてひと月に 60 増えた計算だが、他所での会も驚くほど増え続けた。むろん、落語家の増加もあるが、繁昌亭によって演者と聞き手の双方が活性化されたゆえんだらう。「場」を持てなかった落語家たちも繁昌亭出演をきっかけに独自に場を作り始めた。筆者は 2014 年から「ねたのたね」を引き継ぎ、「ねたのたね 2」（<http://netanotane2.blog.fc2.com/>）という情報網羅の上方寄席カレンダーブログを続けているが、年々、落語会は増える一方で記載が追いつかない

ほど。2017年10月の1ヶ月間をとってみても、関西を中心に開催される落語会は400を超えている。月によって多少の増減はあるが、11年で倍増したわけである。

戦後、上方落語家は漂流民のようにどんな場所でも高座にしてきた。そのたくましさは、江戸の世に辻噺から始まった上方落語の原点にも通じるが、繁昌亭という拠点・居場所ができたことで、多くの落語家に自覚を促し、自信や希望を持って打って出られるようになったのではないだろうか。

繁昌亭以後の落語家たち

繁昌亭は落語家のショーウィンドウになった。開場前年の2005年に、桂文紅、五代目桂文枝、林家染語樓、桂吉朝という大御所や名手を次々喪ったが、その消沈した空気を吹き飛ばす活況を生んだ。一門も芸歴もさまざまな演者が並ぶ繁昌亭の昼席に来た初心者は、落語にふれてその笑いを知り、「こんなおもしろい人がいたのか」と個性いろいろの落語家を知り発見だらけだったろう。

60～70年代、仁鶴や可朝、三枝（現文枝）、文珍、八方、きん枝、小染（先代）、鶴光、春蝶（先代）、朝丸（現ざこば）、鶴瓶らがテレビやラジオから人気者になった。米朝や枝雀も長くテレビやラジオで活躍したが、大多数の落語家はメディアとはほとんど無縁でやってきた。上方の落語家は一般的には全く知られていない芸人が山ほどいたのである。

しかし、繁昌亭の寄席によって、地道に研鑽を積んだ本格派や孤高の実力派に光が当たることになった。テレビの人気者は出ずとも、林家染丸、笑福亭福笑、笑福亭松喬（先代）、笑福亭仁智、笑福亭鶴志、米朝一門の桂ざこばや桂塩鯛、桂米二、桂米団治、さらに2008年12月に14年ぶりに協会に復帰した枝雀一門の桂雀三郎、桂文之助、桂九雀らがトリを担う中堅・ベテラン勢の要になって本領を発揮、初心者に落語の面白さを植えつけた。さらに、それまで落語と距離を置いていた桂きん枝や月亭八方ら吉本の売れっ子も落語に本腰を入れて取り組み、トリを担っている。

消極的だった若手や中堅も、落語を聞こうというお客の前で腕を磨けるようになった。同時に人の落語を聞き、知らなかったさまざまな落語や笑いの手法に接して、自分の実力や生き方を問い直すきっかけにもなった。2010年3月、筆者は開場後がらっと変わった状況と落語家の意識を記録すべく、210人あまりの落語家に再度取材し、「上方落語家名鑑 第二版」を上梓した。その際に桂文福がつぶやいた「息を吹き返した中堅がおおぜいいる」という言葉が忘れられない。

繁昌亭昼席は定席として毎日午後1時～4時すぎまで上演され、東京の寄席のようにひと月を上席・中席・下席と区分するのではなく、一週間ごとに演者を総入れ替えする。一日落語8席、色物2席、計10席の番組構成だ。出演者は最後を締めくくるトリが一番輝くように、ネタの彩りを考え、同時に前の演者とネタがつかないように（噺の趣向が重ならないように）選んで演じ、出番ごとに決められた制限時間内で中トリ、トリはもちろん、前座、二ツ目、三ツ目、カブリ（仲入直後の出番）、モタレ（トリのすぐ前の出番）とい

った役割を果たさなければいけない。「名鑑 第二版」で取材した折、芸歴の長さに関わらずその中で一番多かった意見が、「落語の笑いどころを考えるようになった」という声だった。それぞれの噺の長さはまちまちで、出番に合わせ縮めたりふくらませたりの加工が必要になったためだ。まさに定席初心者らしい試行錯誤であった。

また、一つしかない楽屋で「ふだん会わない噺家と話ができる」ようになり、落語家同士が意識し合う面白い現象が起きた。客席だけではなく、本来プライドの高い一匹狼だからこそ楽屋にいる仲間の目を気にする。そこで、模範になろう、いいところを見せようと思うか思わないかが分かれ目になり、高座での気概の有無にありありと表れた。それしかない鉄板ネタを 1 週間やる演者もいれば、毎日ネタを変え新ネタも披露して奮闘する者もいる。11 年の間に前者と後者の違いは明白なほど人気や実力の顕著な差に結びついている。

一方、繁昌亭がもたらした活気は、上方でそれまでには考えられないような「襲名」ラッシュを生んだ。マスコミでも大きく取り上げられ、興行界は「落語は商売になる」と再認識したのかもしれない。世代交代の時期という背景もあるが、2007 年 1 月の「歌々志改メ三代目桂歌之助襲名」以降、毎年のように大きな襲名が続き 2017 年 11 月までに 14 人を数え、2018 年、19 年にも襲名が予定されている。非協会の「ごころう改メ二代目桂南天襲名」（12 年 4 月）以外は、いずれも繁昌亭で「襲名披露ウィーク」と銘打って豪華な興行がなされ、桂米朝も歌之助襲名披露の口上で初めて繁昌亭の舞台に上がっている。

急増した若手落語家

上方落語家の人数も増えた。繁昌亭開場直前の 2006 年 8 月 1 日の「上方落語家系図」（上方落語協会 彦八まつり実行委員会編）によると、米朝一門＝ 55 人、文枝一門＝ 42 人、春団治一門＝ 22 人、露の一門＝ 11 人、橘家円三＝ 1 人、笑福亭一門＝ 57 人＋松之助一門 3 人＋福郎一門 2 人＝ 62 人、林家一門＝ 14 人。合計 207 人。

それが、開場 11 周年を迎える前日、2017 年 9 月 14 日の時点では（協会の系図より）、米朝一門＝ 73 人、文枝一門＝ 57 人、春団治一門＝ 26 人、露の一門＝ 15 人、橘家円三＝ 1 人、笑福亭一門＝ 70 人＋松之助一門 3 人＋福郎一門 3 人＝ 76 人、林家一門＝ 17 人。合計 265 人にまで増えている。かつてない活況と言えらるだろう。

この 11 年で二代目露の五郎兵衛や三代目桂米朝、三代目桂春団治といった大御所を含め他界した人は 9 人、さらに廃業した人もいたが、70 人以上もの入門者があった。そうして現在、260 人余りいる上方落語家のほぼ半数が、入門 25 年以下の若手という状況だ。

繁昌亭では入門 2 年～ 3 年の年季明け前後の若手が交代で楽屋番をしてさまざまを覚え、舞台袖の囃子場で太鼓や笛や鉦など鳴り物の修業もできる。協会では日本舞踊の師匠に教室を開いてもらってもいて、多くの若手が稽古にかよっている。非常に恵まれた環境と言えらるが、圧倒的にライバルは多く、技量と個性を伸ばして抜きん出る存在になるには強い意欲と向上心を持ち続けることが大事だろう。

戦後、真打制度が事実上、消滅した上方落語界では若手の成長度合いを評価する物差しを持たない。しかし、放送局が設けたものや芸術祭など挑むべき機会となる賞レースも少なく、そのため、繁昌亭では 2007 年から芸歴 25 年以下の若手落語家を対象に「繁昌亭大賞」を設けた。審査は在阪新聞社の記者およびフリーの記者だ。第 1 回の大賞は笑福亭三喬（現・七代目笑福亭松喬）が獲得し、以後、2 回＝林家染二、3 回＝桂吉弥、4 回＝笑福亭銀瓶、5 回＝桂文華、6 回＝笑福亭鶴二、（7 回該当者なし）、8 回＝笑福亭生喬、9 回＝林家花丸、10 回＝林家菊丸、11 回＝桂文三、そして 2017 年の 12 回は林家染雀が受賞している。

また、2015 年から芸歴 4 ～ 20 年の若手対象の「上方落語若手噺家グランプリ」が繁昌亭でスタートした（アートコーポレーションの寄付金を元にアーツサポート関西が助成）。こちらは在阪放送局の製作担当が審査し、第 1 回は桂吉の丞、2 回は笑福亭たま、3 回は桂米輝が優勝している。こうした賞がどれくらい有効なのかわからない。また、落語は審査基準が曖昧で経験値や好みでも左右され人によって尺度は違うものだ。それでも、若手が増え続ける中で、成長を促し背中を後押しするお墨付き的な「評価」もやはり必要だろう。

噺のはやりすたれ

繁昌亭以前から落語を長く見続けてきた者にとって、変化の波を実感するのは高座にかかる演目だろう。繁昌亭開場 10 周年の 2016 年 9 月 15 日、その記念公演で来場者全員に「天満天神繁昌亭落語根多鑑」という番付が配られた。入力ミスでの「抜け」や誤字もあるが貴重な労作には違いなく、繁昌亭の舞台監督で裏方を仕切る中西慶昭氏が中心になってまとめたものだ（写真 6 参照）。実は繁昌亭では開場前の 9 月 9 日と 10 日に、試験的に「プレ落語会」が開かれており、最初の公演となった 2006 年 9 月 9 日～2015 年 9 月 14 日までの丸 9 年間の昼席・夜席・朝席でかかった全ネタを集計。番付はその回数の順位を出して作成している。配られた番付には回数も順位も記されていないが、大元になった詳細な集計表を中西氏から譲り受けた。それを検証することにする。

- ・総口演回数 4 万 4628
- ・高座にかかったネタ総数 2160

このうち、100 回以上かかったネタは 114、その一方、1 回きりのネタは約半数の 1000 以上あり、ほぼすべてが新作。

【演目のベスト 20（カッコ内は高座にかかった回数）】

- 1 「時うどん」(1131)、2 「動物園」(978)、3 「子ほめ」(925)、4 「手水廻し」(729)
- 5 「犬の目」(604)、6 「看板の一」(557)、7 「狸の賽」(556)、8 「道具屋」(533)
- 9 「いらち俵」(521)、10 「つる」(511)、11 「替り目」(508)、12 「ちりとてちん」(497)
- 13 「桃太郎」(468)、14 「延陽伯」(430)、15 「青菜」(422)、16 「初天神」(420)
- 17 「ふぐ鍋」(406)、18 「阿弥陀池」(387)、19 「相撲場風景」(369)、20 「寄合酒」(359)

ベスト 20 は軽い目の噺が多いが、これを見てわかるのは、繁昌亭でのネタの傾向として初心者向きに展開がわかりやすく仕草も入る、つまり笑いをとりやすい噺が多いことだ。

「時うどん」「動物園」「手水廻し」「いらち俵」はその顕著な例で、とりわけ、以前は風変わりな前座噺にすぎなかった「動物園」の急増ぶりが目立つ。どこか現代風でトラを真似る動きが笑いに直結する噺であり、とにかくウケたい若手がこぞって飛びついた。逆に前座の定番だった上方独特の旅噺は減ってしまい、「東の旅発端」は 153 位で 70 回しかかかっておらず、「宿屋町」は 285 位で 27 回。かろうじて「兵庫船」が 69 位、「煮売屋」が 79 位でどちらも 150 回を越しているが、以前なら旅噺は飽きるほど聞いた。江戸時代の風景が広がるこうした噺に平成生まれの若手自身になじまないのかもしれないが、「つる」など根問物同様、落語の手法が詰まった面白味と懐かしい景色があり、繁昌亭の客にあまり提供しないことに寂しさともどかしさを感じる。それも落語の流れだろうか。

また、明治から大正にかけて上方の噺は東京に大量に移され、現在、東京でかかるネタの半分以上は上方種と言われるが、繁昌亭開場後、東西交流が一気に盛んとなり、昨今は逆に上方で東京からの移植ネタが日々かかるようになった。集計を見ると「野ざらし」の 320 回という多さは驚きの数字で、「長短」(152)、「紙入れ」(164)、「厩火事」(95)「星野屋」(95)、「火焰太鼓」(95)と続き、「笠碁」「転宅」「粗忽長屋」「井戸の茶碗」「芝浜(夢の革財布)」など江戸落語の代表的な噺が大阪の土地に移され大阪弁で語られている。どれも上方にない展開の新味があり、笑いが多いか、あるいは情の濃い噺だ。

古典・新作の内訳でいえば、上位 300 の噺のうち新作は 5 分の 1 の 63 本もあり、当代文枝の作品が多いが、福笑や仁智など創作派がおおいに活躍し人気を得る中で、若手も中堅も新作をやる人が目に見えて増えたためだ。だが、1 回きりの掛け捨てのような新作が 1000 以上に及ぶことを見れば、特に若手の創作力と落語への認識の不足は否めない。

ことほどさように、演目には偏りが見られるようになった。人がウケれば自分もと、そんなネタはますます頻繁にかかり、かからなくなった古典はどんどん忘れられていく。繁昌亭でほとんど口演されなくなり(9年で10回以下)、消滅の危機さえある古典佳品は「茗荷宿」「月宮殿星の都」「坊主の遊び」「本能寺」「深山がくれ」「盗人の仲裁」「百人坊主」「矢橋船」「三人旅」「按摩炬燵」「鉄湯」などなど 70 近い噺にのぼる。

そこまでいかずとも、200 位以下の「首提灯」(49)、「抜け雀」(49)、「百年目」(49)、「へっつい幽霊」(48)、「植木屋娘」(48)、「仔猫」(46)、「質屋芝居」(46)、「千両みかん」(43)、「帯久」(25)など古典の名品が昼席では滅多にかからず、夜席の独演会などでも上演が稀な演目になった。時間の関係もあろうが、難しい大ネタに手を伸ばさず、やりやすくウケやすいネタに集中していく傾向が読み取れる。

上方落語衰退期の 1936 年～1940 年に五代目笑福亭松鶴主宰の楽語荘が発行した「上方はなし」(全四十九集)には保存継承を目的に 70 ほどの上方落語を収載された。そのうちの「人形買い」や「三人兄弟」など約 20 の噺が繁昌亭ではかかっているのだ。また、桂米朝の最大の遺産である「米朝落語全集」には 134 の噺が収載されているが、このうち 30

の噺（増補改訂版では 156 のうち 36）が誰にも演じられていない。噺家が亡くなればその持ちネタも消える場合はままあるが、両師とも未来への継承を願って本に残した。消えつつあるのは上方らしい趣のある噺ばかりだ。もったいないと言うべきだろう。

ただ、ベスト 20 のうち 12 の噺が、また、ベスト 50 を見ても半数以上の噺が桂米朝の知の所産だ。つまり、米朝師が細やかに笑いの工夫をほどこし、古い言い回しを変えサゲを変えるなど仕立て直して、現代に通じる商品に蘇らせたものばかりなのだ。その巧妙さゆえ、ほとんどの落語家はもともとの古典がそうだったと思って演じている。多くの若手も「動物園」が米朝が復活させ仕立てた噺とは知らずに演じているわけである。

上方落語のこれから

2015 年 3 月に桂米朝が逝き、2016 年 1 月に三代目桂春団治が亡くなり、四天王全員がこの世を去った。きっぱりと戦後からの復興と発展の奇跡の時代は終わった。繁昌亭は実にタイミングよく過渡期に誕生し、次代の上方落語の土台を築く場となった。初心者への普及効果は絶大で、上方落語家の最良不可欠の拠点ともなった。

けれども、春団治が亡くなる前「面白い落語は増えたが、いい落語が減った。いい落語をせなあかん」と弟子を諭したように、繁昌亭では総体的にウケ狙いの笑いが優先され、自然な語りで噺の空気を作り人間の心の機微を描く、そういう落語の芯を見失いがちだ。演芸評論を糧とする筆者は毎週昼席をのぞくが、この 11 年で若手からベテランまでいつ見ても同じネタで笑いをとろうとする演者が増える傾向に正直がっかりする。惰性になったり目先の満足にとらわれたりするの定席が抱える負の一面だ。落語ファンやリピーターが昼席から遠ざかったゆえんでもある。が、初心者も侮れない。落語は他の伝統芸能と違い素人にも良い悪いの判断がつく芸能だからだ。全力投球する者だけが浮かばれよう。

爆笑王の桂枝雀や正統派旗頭だった桂吉朝はどうに亡くなり、繁昌亭当初から活躍した先代松喬も没し、皆の手本となった染丸は病で舞台復帰できずにいる。上方落語の本流を牽引する人の不在は大きく、技量や質の低下も懸念材料だ。成長途上の本格派期待株はたくさんいるが、研鑽を積み人間を磨くのにあと 10 年～20 年は待たねばならない。それでも、若手にさらなる繁栄は委ねられており、未来の落語を引っ張っていく理想に燃えた逸材はいつか出てくると期待したい。

2017 年 10 月、上方落語協会によって大阪天満宮に境内社として「高坐招魂社」が建立された。この時期に繁昌亭の近くに上方の先人落語家の「御霊」を祀る社ができたのは喜ばしい。江戸時代から続く上方落語の大きな流れと数多の先人落語家への感謝を意識したとき、改めて見えてくるものがあるのではなかろうか。伝承が要の大衆芸能だからこそ、温故知新のまなざしで百年先をみつめ継承と改革の両輪で歩いていく、繁昌亭はその本丸とならねばならない。

（研究分担者、本名・太田リヨ子）